

中部大学日本伝統文化推進プロジェクト

NIHON



BUNKA

2022 年度活動報告書

Vol.4

ごあいさつ

中部大学日本伝統文化推進プロジェクト長
フェロー 辻本雅史



2022年度の活動報告書をお届けいたします。活動開始以来4年、この間、COVID-19パンデミックに見舞われ、活動に大きな制約を受けましたが、文化とじかに接することの重要さや、人と人をつなぐ文化の力にも気づくことができました。ようやく徐々に常態に復しつつあり、活動も軌道に乗ってきたように思います。

本プロジェクトは、学生たちが日本の伝統文化に親しく触れて、教養豊かな国際人に育っていくことを期待した活動です。そのためには、学生たちの主体的な活動が望まれます。その願いを込めて、本年度より、企画段階から学生たちに参加してもらうことにしました。その成果がさっそく新たな活動に結びつきました。本プロジェクトでは、毎年、日本舞踊西川流家元の西川千雅先生ご指導のもと、日本舞踊のお稽古を行っておりますが、その活動と併設校・春日丘中学・高校の吹奏楽部とのジョイント企画が実現したのです。春日丘中・高の音楽祭「第19回 音の宴」に、同校の吹奏楽をバックに日本舞踊を舞うという、異色の「日本伝統文化ステージ」が用意されました。これには二つの点で大きな意義があります。一つは、本プロジェクトと併設校との高大連携が、企画段階から初めて取り組まれたこと、二つにはこれが学生の提案によって実現したことです。この企画の提案してくれた学生と、それに応諾いただいた校長先生及び諸先生方、また限られた時間のなか、特別なご指導いただいた西川まさ子先生に、あつくお礼申し上げます。

春日井市で「悠遊会」という草木染の会を主宰されておられる矢野美代子先生から、貴重な作品群をご寄贈いただきました。それを機に、草木染を実践的に学ぶ学生向けの講習会も開催できました。地域の方々にも積極的にご協力いただき、地域連携の活動にもなり意義深いもの。矢野先生のご厚意に感謝いたします。

私どもは、学内の学部・学科との連携、学園内での連携、さらに文化を介した地域との連携に、今後とも積極的に取り組み、伝統文化豊かな学園づくりに努めます。引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

2023年3月

目次

ごあいさつ

1. 能楽鑑賞会	p.3
2. 日本舞踊公演会	p.5
3. 伝統話芸の世界 講談 落語	p.7
4. 草木染め ワークショップ	p.9
5. 学園連携 中部大学春日丘高等学校、中部大学第一高等学校 中部大学春日丘中学校	p.11
6. 日本伝統文化講座	p.13
7. 俳句講演会(共催)	p.18
8. その他	p.19
プロジェクトメンバー紹介	p.21

2022 年度日本伝統文化推進プロジェクト実施一覧

■能楽鑑賞会「高砂」

日 時：2022年5月25日(水) 15:20~16:50
場 所：不言実行館アクティブホール
講演者：シテ方観世流能楽師 久田勘鷗氏、
久田三津子氏、他
参加者：132名(学生122名、教職員10名)
※HPにて動画公開

■日本舞踊公演会「無駄なことにも宝はある」

日 時：2022年7月6日(水) 15:20~16:50
場 所：三浦幸平メモリアルホール
講演者：西川流家元 西川千雅氏、
西川まさこ氏、西川ゆりえ氏
参加者：152名(学生146名、教職員5名、一般1名)
※HPにて動画公開

■日本の伝統話芸「伝統話芸の世界」

第1部 講談「杉原千畝物語」旭堂鱗林氏
第2部 落語「落語を聴こう」登龍亭獅篁氏
日 時：2022年11月9日(水) 15:20~16:50
場 所：三浦幸平メモリアルホール
講演者：講談師 旭堂鱗林氏、
落語家 登龍亭獅篁氏
参加者：220名(学生93名、教職員18名、春日丘
中学校の生徒109名)

■草木染め(ワークショップ)

日 時：2022年11月2日(水) 11:15~12:45
場 所：70号館中庭
講演者：矢野美代子氏
参加者：20名(学生15名、教職員5名)

■日本伝統文化講座

(古典文学研究会 能楽・日本舞踊・茶道)
日 時：春学期 金曜日15:20~16:50
秋学期 金曜日15:20~16:50
場 所：2544講義室(能楽・茶道)
お茶室(能楽)
ダンススタジオ(日舞)
講演者：久田勘鷗氏(能楽 6回)
谷口剛久氏(茶道 3回)
西川千雅氏(日舞 4回)
西川まさこ氏(日舞 4回)

■俳句講演会「俳句と連句」

(主催日本語日本文化学科に共催)
日 時：2022年10月5日(水) 13:35~15:00
場 所：不言実行館1階 アクティブホール
講演者：大野鶴士氏
参加者：80名(学生72名、教職員8名)

■中部大学春日丘中学校・高校音楽祭 響演「音の宴」(参加)

日 時：2022年12月23日(金) 16:00~18:30
場 所：春日井市市民会館
主 催：中部大学春日丘中学校・高等学校
協 力：中部大学
参加者：450名 ※HPにて動画公開

1.能楽鑑賞会 「高砂」

解説 久田勘鷗 氏(シテ方観世流 能楽師 重要無形文化財総合指定保有者)
「高砂」久田勘鷗 氏、久田三津子 氏他

2022年5月25日(水)、不言実行館1階アクティブホールにおいて、能楽鑑賞会を開催した。コロナ禍のため、観覧は学内の関係者のみで行われ、学生122人、教職員10名の参加があった。また後日ビデオ配信でも提供された。演目は能の代表的な祝言曲である「高砂」であり、現在の不穏な世界情勢に対して、少しでも明るい兆しをという祈りを込めた演目であった。

演者は本学客員教授でもある久田勘鷗氏、久田三津子氏(ともに重要無形文化財総合指定保持者)他の方々であった。舞台上では、「高砂」の解説とともに、衣装の着付けの実演が行われた。能の舞台裏を垣間見る機会はなかなかないので、学生達にとっては良い経験となったものと考えられる。又、舞台上で、一人の学生が、実際に能面を付けさせていただく場面もあった。

着付けを終えた後、「高砂」の一幕が舞台上では展開され、能楽が初めての学生も多かったようである。

■学生感想(日本語日本文化学科、1年、女子)

今まで能楽という文化があるということは知っていましたが、どういうものなのかは知りませんでした。能と狂言の違いも分かっておらず、似ているはいるけど全く違う芸能だと思っていましたが、能と狂言の2つが織り込まれたものが能楽だと知りました。また、衣装を着るのも大変そうだと思います。3人がかりで袴を着せたり面を付けたりと、舞台に上がるまでの準備の段階で結構時間がかかるようですね。衣装の総重量が10Kgほどあると仰っていたので、相当重くて暑いのだらうと思います。私だったら衣装を着てちょっと動いただけで疲れそうだと思います。あの衣装を着てスムーズに動いて演じきるにはよっぽど稽古や練習が必要だと思うので能楽師の方々の普段の努力が感じられました。

舞台上で面をつけて演じるのは男性だけしかできないと思っていたので女性でもやられる方がいるとは知りませんでした。男性では低く野太い声で迫力があり、女性では高い声で男性より聞き取りやすく感じました。演じる方の性別はもちろん、年齢や個性によって同じ内容の話でもそれぞれ違う印象を受けると思うのでいろいろな方の能楽を観るのも楽しそうだと思います。

能楽は言葉も難しく理解しきれない部分が多く自分から見に行くという機会もなかったのですが、この講義で実際にやっている所を見て能楽という文化を繋いできた人々の思いが感じられました。長い歴史を持つ日本の伝統文化が失われ実際に生身で体感できなくなるということはあってはならないことだと思います。能楽を失わせないために自分にできることは少ないですが、能楽に触れ関心を持ついい経験になったと思います。(原文ママ)



中部大学日本伝統文化発掘プロジェクト

NIHON BUNKA
日本文化を学ぼう！

— 能楽鑑賞会 —
T A N A B A O

能高砂
久田 勘徳 久田 三津子
演奏 兼介 奏

2022年
5月25日(水)
15:20～16:50 (開場15:00)
不言実行館1階アクティブホール
※感染防止対策、十分な換気があります



HIRADA KANETOKU
久田 勘徳 師
○1953年 徳島県生まれ
○1978年 能楽科 卒業
○1980年 能楽科 卒業
○1982年 能楽科 卒業
○1984年 能楽科 卒業
○1986年 能楽科 卒業
○1988年 能楽科 卒業
○1990年 能楽科 卒業
○1992年 能楽科 卒業
○1994年 能楽科 卒業
○1996年 能楽科 卒業
○1998年 能楽科 卒業
○2000年 能楽科 卒業
○2002年 能楽科 卒業
○2004年 能楽科 卒業
○2006年 能楽科 卒業
○2008年 能楽科 卒業
○2010年 能楽科 卒業
○2012年 能楽科 卒業
○2014年 能楽科 卒業
○2016年 能楽科 卒業
○2018年 能楽科 卒業
○2020年 能楽科 卒業



HIRADA MITSUKO
久田 三津子 師
○1958年 徳島県生まれ
○1980年 能楽科 卒業
○1982年 能楽科 卒業
○1984年 能楽科 卒業
○1986年 能楽科 卒業
○1988年 能楽科 卒業
○1990年 能楽科 卒業
○1992年 能楽科 卒業
○1994年 能楽科 卒業
○1996年 能楽科 卒業
○1998年 能楽科 卒業
○2000年 能楽科 卒業
○2002年 能楽科 卒業
○2004年 能楽科 卒業
○2006年 能楽科 卒業
○2008年 能楽科 卒業
○2010年 能楽科 卒業
○2012年 能楽科 卒業
○2014年 能楽科 卒業
○2016年 能楽科 卒業
○2018年 能楽科 卒業
○2020年 能楽科 卒業

© 中部大学 中G0-1階014号 日本伝統文化発掘プロジェクト事務局 | 入次室 0564-23-1100
TEL: 0564-23-1100 FAX: 0564-23-1104 E-mail: jimbaw@office.chubu-u.ac.jp



2.日本舞踊公演会

解説 西川千雅氏(日本舞踊西川流四世家元)

実演 西川千雅氏、西川まさ子氏、西川ゆりえ氏

2022年7月6日(水)、三浦幸平メモリアルホールにて、日本舞踊家西川千雅氏と、西川まさ子氏による解説と実演を開催した。参加者は学生146名、教職員5名、一般1名 計152名であった。

本年は、「無駄なことにも宝はある」と題する公演会を開催していただいた。

「日本の歴史と文化」の中で授業を受けている全学の学生や、日本語日本文化学科の学生を中心に、学生達は西川千雅先生の話術と西川まさ子氏、西川ゆりえ氏による実演に引き込まれていた。京都の芸妓の経歴を持つ西川ゆりえ氏による化粧のプロセスに学生達は魅せられ、その後一緒に写真を撮る為の列が出来ていた。学生達は今回の公演会で日本舞踊に関する認識を改めたようである。更に、西川まさ子氏による本学での稽古を希望する学生もおり、有益であった。

■学生感想(環境生物科学科 4年女子)

最初に西川さんが仰っていた人や物事の価値の話で確かに、と思うところがありました。ノーベル賞と受賞した人や現代社会で必要不可欠な発明をした人、過去の歴史を解き明かす人など誰が見ても立派で価値がある人というのはもちろんいますが、ただ平凡な日常生活を送っているだけの人でも他の年代や性別の人からしたら価値があると思われていることもあると思います。自分では価値がないと思っていることでも他の誰かにとっては価値があるかもしれないから人とのコミュニケーションを円滑にするために勉強する、自分にとって価値のあることだから周りに広めたり後世に残す、この繰り返しで文化や歴史が現代にまでつながっているのかもしれないと思いました。

芸者さんの髪の毛のセットやメイクもどうやっているのか気になっていたのが今回はそれが見れて楽しかったです。髪も毎回セットしていると思っていたのですが、自分の頭に合わせた髪だったとは知りませんでした。私も普段、出かけるときは化粧をしているのですがベタベタするのが嫌であまり顔に下地やファンは塗りにくいのですが、いきなり密着力をよくするため油を塗るとは驚きました。確かにこれだけ粘度のある油を塗ればおしろいも落ちないだろうと思います。現代でいうノーズシャドウやアイシャドウのように今のメイクとほとんど同じ工程だと思っていたら現代の流行を取り入れアレンジしたメイクになっていて、今でも芸者さんの人気があるのはこういった工夫をしているからなのかなと思いました。着付けもとても手際が良くしわもなく非常にきれいでした。メイクと着付けを合わせて40分ほどでやっていてとても早くて驚きました。

実際に踊っているのを見るとやはりメイクや服装も相まってとても色気を感じました。男性と女性では印象も違ってよりしなやかで目線や指先の所作など細やかなところで違いがあるように感じました。

(原文ママ)



中部大学 日本舞踊文化会主催 (主催)

NIHON BUNKA
日本文化会主催

**日本舞踊
公演会**

2022年
7月6日(木)
15:20~16:50
(開場 15:00)
三浦幸平メモリアルホール
※観覧は無料です

西川 千雅 師
NISHIKAWA, CHIKAMASA
DANCE, JAPANESE
中部大学 日本舞踊文化会
〒466-8501 岐阜県岐阜市大田町1-1-1
TEL:0582-51-4044 E-mail: jibunka@cc.fsc.chubu.ac.jp

© 中部大学



3. 伝統話芸の世界

第1部 講談「杉原千畝物語」 旭堂鱗林氏

第2部 落語「落語を聴こう」 登龍亭獅籠氏

2022年11月9日（水）三浦幸平メモリアルホールにおいて、「伝統話芸の世界」と題して実演が行われた。第1部「杉原千畝物語」は旭堂鱗林氏により、第2部「落語を聴こう」は登龍亭獅籠氏により行われた。旭堂鱗林氏は、上方講談協会に所属する講談師で、名古屋の大須演芸場などで活躍されている。登龍亭獅籠氏は、落語家であると共に、漫画家でもあり、学生の要望に応じて似顔絵を描いておられた。また、春日丘中学校の生徒たちは今年も壇上に上がって、落語の初歩に積極的に取り組んだ。

■ 学生感想(日本語日本文化学科 1年女子)

今回講談を初めて聞きました。杉原千畝さんの話は、政府の命令に背いて、最後の最後までユダヤ人にビザを書き続けたという事を聞いて、すごくかっこいいな、同じ日本人として尊敬するなと思いました。杉原さんの話をしている時に、旭堂鱗林先生が杉原さん、奥さん、子どもさんの台詞それぞれで声を変えていたので、情景がパッと目に浮かびました。腕のマッサージをする場面でも、実際に腕をマッサージする場面が浮かびました。

落語はテレビで少し見たことがありました。落語といえば、扇子を箸に見立てて、蕎麦をすするのが有名だと、個人的に思っていたので、今回実際に生で見ることが出来て嬉しかったです。本編の前のマクラで、右を見て左を見たら話が終わるといっているので、最初聞いた時は嘘だと思ったけど、実際に聞くと、本当にポンと話が終わってしまったので驚きました。本編に入ってから、聞いているとだんだん内容がわかってきて、結末がわかるという感覚がとても新鮮で楽しかったです。(原文ママ)

■ 中学生感想

一部が始まって数分もしないうちにすっかり鱗林先生の世界に引き込まれてしまい、杉原千畝物語では、何度か危うく泣きそうになりました。「貴方のおかげで生きています」なんて言われたら感動で泣いてしまいます。千畝さんが命のビザを発行したというのは知っていましたが、まさか一枚一枚手書きだったとは思っていませんでした。よく考えてみれば昭和の時代に印刷機なんてハイテクなものに入らないですね…そもそも発明されていたのかしら？

第二部の落語では、笑いのスイッチが入ってしまって、山田くんが先生の家にお邪魔した辺りからはもうちょっとしたことでも笑える、というよりは常に笑えばなしになっていました。こんなに笑ったのは久しぶりです。

講演全体を通して、笑いあり涙ありの素敵な講演をありがとうございました。深い感銘のあまり、滑り込みで体験をしてしまいました。こんな景色なんだ、と本当に貴重な経験ができました。伝統文化に携わった仕事を視野に入れるほどに楽しかったです。(原文ママ)

4.草木染め ワークショップ

講師 矢野美代子氏

2022年11月2日(水)に、70号館1階ラウンジと71号館への通路において、春日井市在住の染色家、矢野美代子氏による草木染め講習会を開催した。会場作りには、現代教育学部の事務室の方々にご協力いただいた。

今回は草木を煮出して染液を作る時間がないため、天然のインド藍を用いた。参加者は、学生が16名(日本語日本文化学科12名、幼児教育学科2名、現代教育学科1名、大学院国際人間学研究科1名)、教員が4名(辻本雅史プロジェクト長、井上徳之教授、千田隆弘講師、永田典子教授)であった。

そのほか、矢野氏が主宰する悠遊会のメンバー10名がサポート役として参加された。

このたびの開催は、矢野氏が古布の作品コレクション(明治から昭和にかけての外出着・普段着・仕事着・中着・補助衣・家財衣・諸布類)55点を本学に寄贈された縁によるものである。これらの作品は、日本伝統文化プロジェクト室(不言実行館5階)に保管されており、その目録は、2023年度中に本プロジェクトのウェブサイトアップロードする予定である。

講習会では、矢野氏から草木染めの歴史や魅力、手入れ方法などについて説明があり、続いて模様づけのための絞り方の実演が行われた。この日のために矢野氏が事前に染めたサンプル模様が、ビー玉や輪ゴム、割り箸、竹箒、洗濯ばさみ、フィルムケースなどの身近なものでできていることに学生たちは関心を持ったようである。その後、いよいよ作業開始である。70号館1階ラウンジを出たところに長机を置き、絞りの道具を並べると、悠遊会の方々が生徒ひとりひとりに絞り方の手ほどきをしてくださった。ビー玉やら洗濯ばさみやらをつけた布は、まず水に浸し、軽く絞ってから染液に投入する。数分後に引き上げると濃い緑色をしており、それを水洗すると藍色に変化し、その瞬時のできごとに皆驚いた。次に布につけたものをすべてはずして再び水洗いすると、発色がさらに進み、最後に色止めのために酢酸水につけて水洗いをした。晴天のもと、藍染め布は秋風にほどなく乾き、学生たちは仲間と楽しそうに作品を見比べあっていた。



学生たちの作品を見ると、それぞれの絞り模様が唯一無二であることは当然のことながら、同一の藍液であったのにも関わらず、色調が異なっていた。草木染めは、まさに自分だけの模様、自分だけの色を楽しむことができる技法といえよう。但し、矢野氏によれば、草木染めは化学染料とは違ってデリケートであるため、保管に注意が必要だという。布を折りたたんだ状態で保管すると、折り山部分に変色するため、約1年間は筒状に巻き、直射日光を避けて保管するとよいそうである。手間のかかることであるが、変色、退色しても、それを失敗とせず、時とともに変化する味わいとしても楽しめるという。

作品を手にした学生たちの感想を聞くと、作品作りを楽しみながら、伝統的な生活文化と環境保全との関係を考えるようになったという声や、今後も先人たちの知恵を学ぶ機会を求める声もあり、講習会は無事に終了することができた。

藍染めの後には、矢野先生からベンガラ（赤色顔料）を使用した葉脈染めについても教えていただき、先生が用意した大きな手ぬぐいとハンカチに模様をつけた。



5.学園連携

(1) 日本舞踊のお稽古と「音の宴」での発表

「音の宴」で高校生(吹奏楽部)が大学生と美しい舞を披露

中部大学春日丘中学校・高等学校との連携

2022年12月23日(金)に春日井市民会館で、中部大学春日丘中学校・中部大学春日丘高等学校音楽祭「響演 第19回音の宴」が開催され、日本語日本文化学科の学生(4年生3名、1年生4名)と、中部大学春日丘高等学校吹奏楽部有志(3年生4人、2年生5人、1年生8人)の計24名が、美しい着物姿で日本舞踊を披露した。

日本伝統文化講座の「日本舞踊お稽古」は、秋学期に、西川流家元代理西川まさ子氏、西川豊代乃氏のご指導により、中部大学ダンススタジオにて大学生向けに実施されているが、今回は併設校である中部大学春日丘高等学校吹奏楽部の有志もお稽古に加わり、9月より大学生と高校生が共に日本舞踊の練習に励んだ。

高校生は全員が日本舞踊初心者だったが、授業後に中部大学ダンススタジオへ足を運び、先生の指導と学生の助言を受けながら練習を重ねていくなかで、次第に優美な所作を身につけていった。学生も高校生に刺激を受け、相乗効果を感じる熱の入った練習が重ねられた。

発表の場を模索していたところ、12月に開催される中部大学春日丘中学校・中部大学春日丘高等学校音楽祭「響演 第19回音の宴」で「中部大学日本伝統文化推進プロジェクト連携企画」として発表できることが決定した。この「音の宴」は、中部大学音楽祭がその前身であり、大学と併設校の学生・生徒がともに音楽を発表していた三浦学園音楽祭をルーツに持つ学園の伝統的な行事である。その意味で、大学と高校の連携企画の発表にふさわしい場であった。

舞踊曲「この冬が過ぎれば」は、西川流が創案した日本舞踊の動きをもとにした運動プログラムであり、作曲は映画「もののけ姫」の音楽制作にも参加した二胡奏者のジャー・パンファン先生の手によるものである。発表当日は、観覧に集まった約500名の観客を前に、舞台上にて辻本雅史プロジェクト長、西川まさ子氏にご挨拶をいただき、着付け師の着付けにより華やかな着物を身につけた学生と高校生が一体となって練習の成果を存分に発揮して、共に日本舞踊を舞った。万雷の拍手を浴びた出演者は満足感が高かったようで、来年もぜひお稽古を続けたいという声が多くであった。



(2) 着物の着付け教室と茶道講座

中部大学第一高等学校との連携

2022年8月22日(月)に第一高校の有志生徒が参加し、中部大学で洞雲亭(和室)において着付け教室と茶道講座を受講した。着付け教室では、中部大学の学生2名が講師を務め、着物の着方を指導した。また、茶道講座では、学生2名が茶席の作法を指導した。



(3) 「連句を巻こう」

中部大学春日丘中学校との連携

中部大学春日丘中学校の中大連携(中部大学との連携活動)の中で、「連句」をテーマにしたグループを岡本聡教授が指導した。2022年7月8日(金)の事前授業からスタートし、8月23日(火)～25日(木)の3日間には洞雲亭(和室)での特別授業「連句を巻こう」を実施した。参加中学生20名を中部大学の学生9名がティーチングアシスタント(TA)として指導した。

事前授業をふまえて、連句の発句を持ち寄り、グループ内で1句選び、それをもとに連句を巻いた。36句で一作品となる「歌仙」や、その半分に当たる「歌仙一折」の完成を目指して生徒が知恵を出し合った。また、活動展開の工夫としてワークシートやタブレット端末を駆使し、悩んだ際にはTAがアドバイスをを行い、作品を完成させた。また、作句の順番待ちの際には茶道体験も実施した。TAの中に表千家や裏千家を嗜む学生がおり、両流派の差異も紹介した。

生徒たちは活動の成果を9月15-16日の啓明祭(文化祭)で発表した。感想では、抹茶体験が強く印象に残ったこと、連句を通してボキャブラリーが増えたこと、TAとの交流に対する感謝の文言が見られた。



6. 日本伝統文化講座

2022 年に開催された日本伝統文化に関わる授業・講座・イベント等は以下の通り。

(1) 春学期授業 「日本の歴史と文化」

全学共通教育科目として、「日本の歴史と文化」(講師:岡本聡・井上徳之)が開講された。日本伝統文化に関わる能楽・茶道・日本舞踊・連句等をテーマに、学外からも講師を招いて、次の通り実施された。場所は 2544 教室で行われた。

日 付	講 座	講 師
4月 8日	ガイダンス	井上 徳之
4月15日	能 楽	久田 勘鷗
4月22日	茶 道	谷口 剛久
5月 6日	日 本 舞 踊	西川 千雅
5月13日	能 楽	久田 勘鷗
5月20日	日 本 舞 踊	西川 千雅
5月27日	茶 道	谷口 剛久
6月 3日	連 句	樗木 宏成 (岡本聡)
6月11日	能 楽	久田 勘鷗
6月17日	日 本 舞 踊	西川 千雅
6月24日	茶 道	谷口 剛久
7月 1日	日 本 舞 踊	西川 千雅
7月 8日	伝 統 的 教 育	辻本 雅史
7月22日	書 道	原田 凍谷



受講学生の声

【環境生物科学科 4 年女子】

この講義では毎回のように各分野の著名な方々がいらっしやってそれぞれの文化の歴史や演者の役割などの解説をしてくださったり、講演会を開いて実際に演じている所を見せてくださったりと普段ではなかなかできないとても貴重な経験が出来ました。

茶道も作法や所作などに厳しいイメージがありましたが家やカフェでお茶するのも茶道だとおっしゃっていたのが印象深いです。伝統文化というとなんだか堅苦しいというか格式高く気軽にできるものではないと思っていましたが、日本舞踊でも茶道でもおっしゃっていたように日常のちょっとした動作や行動の中に取り入れられることもあるのだと学びました。

書道は私自身習っていたので講義回数は少なかったですが一番楽しかったです。字体の変化の歴史については知らなかったので、書体が書きやすさから見やすさを重視したものに変わっていき今の楷書体ができたのだと学びました。実際に筆ペンで字を書いてみるとシャーペンやボールペンより書くのは難しいですし、気を使って描かないと線が弱々しくなってしまいますが丁寧に書くぶん普段よりきれいな字が書けました。

一度失われた文化を復興させるのはとても難しく、二度と目で見て体験することはできないかもしれません。文化を後世に繋いでいくのはそういった意味でも非常に重要なことだと思いますが、コンプライアンスや男女平等、LGBTQなどの意識が高い今の時代では問題視される点も多く伝統文化を正しく残していくことも難しいのかもしれない。(原文ママ)

【経営総合学科 2 年男子】

日本の歴史と文化を学び、たくさんの日本の伝統芸能について学ぶことができました。

茶道の講義では、自分はあまり抹茶を好んでいなかった抹茶に興味を持てたと感じています。茶道での作法や、使われる道具、茶の種類などたくさんのことを知れました。自分は茶の種類は茶の葉の種類が違うものだと思っていたが、実際はゆでる時間や、採集の時期などすべて同じ葉からすべての茶ができていくことを知り、とても驚きました。抹茶の立て方や、飲み方、その横についているお菓子など、初めて知ることが多くありました。抹茶を少しでも飲んでみたいと思った講義だったので、一度いい抹茶を飲んでみたいと思いました。

連句で学んだことは、江戸時代に栄えたに日本文学の形式であり、それを俳諧と呼ぶことを初めて知りました。正統の連歌から分岐して、遊戯性を高めた集団文芸であり、発句や連句といった形式の総称であることを知りました。十七音節である、5・7・5の長句と十四音節の短句を、一定の規則に従って交互につけ連ねる様式の詩文芸を知りました。

一番自分が興味を持った分野は、茶道です。抹茶について深く学ぶことができたので良かったです。苦手である抹茶に少しでも興味を持てたので、いつかいい抹茶を飲んでみたいと思いました。(原文ママ)

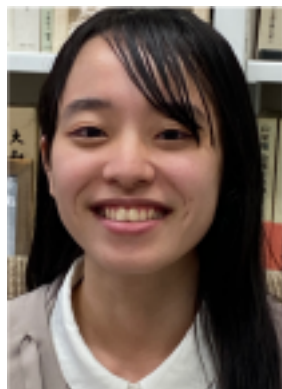
(2) 着付け講座

学生からの主体的な要望をもとに「着付け講座」が開催された。着物の着付けを4回セットで学ぶことができる講座で、着付け指導は「きものサロン東京堂」の協力を得て実施された。意欲的な学生が多く、春学期に3講座、秋学期に2講座の年間5講座を開催し、約20名の学生が参加した。



(3) 着付けコンテスト

着付け講座（春学期）を受講した松葉綾乃さん（日本語日本文化学科3年）が「全日本きもの装いコンテスト東海・中部大会」に参加し、振袖部門の2位に選出された。



(松葉綾乃さん)



(4) 秋学期 日本舞踊・能楽のお稽古

9月30日	日本舞踊	西川まさ子	ダンススタジオ
10月28日	日本舞踊	西川まさ子	ダンススタジオ
11月11日	能楽	久田勘鷗	お茶室
11月18日	日本舞踊	西川まさ子	ダンススタジオ
12月2日	能楽	久田勘鷗	お茶室
12月9日	日本舞踊	西川まさ子	ダンススタジオ
1月13日	能楽	久田勘鷗	お茶室

中部大学ダンススタジオにおいて、秋学期に、西川流家元代理西川まさ子先生、西川豊代乃先生によって、日本舞踊のお稽古が行われた。今年度はこのお稽古が、12月23日（金）に春日井市民会館で行われた、中部大学春日丘中学校・高校音楽祭、響演「音の宴」とのコラボにつながった。



中部大学ダンススタジオ及び洞雲亭において、秋学期を通して久田勘鷗氏より、能楽のお稽古が行われた。舞と謡の実践的講義が行われた。



(5) 日本伝統文化と七夕の講話

幼児教育学科との共催

2022年6月9日（木）、幼児教育学科の授業「環境と生活」（担当：千田隆弘講師）が行われた。この授業では、第9回から第13回までの5週にわたって伝統行事の「七夕」について学んだ。第9回には伝統工芸士の加藤高明氏を招き、七夕をはじめとする日本の節句についての講話と七夕飾りの製作を行った。製作した七夕飾りは、70号館1階のラウンジに展示した後、笹に飾った。参加者は幼児教育学科の学生（1年生81人、3年生6人、4年生2人）とほか2人である。



(6) CAAC 事業による源氏物語屏風の活用

CAAC との共催

2022年9月30日（金）と10月7日（金）に、生涯学習の社会人講座であるアクティブ・アゲイン・カレッジ（CAAC）において、名古屋大学名誉教授である高橋亨先生により、本学所蔵の二種類の源氏物語屏風を用いて、講座が行われた。この屏風は本プロジェクト活動のうちから、本学の所蔵となったものである。CAACを受講している方々は、源氏物語屏風のそれぞれの場面に関する説明に聞き入っていた。



7.俳句講演会(共催)

講師 大野鶴士氏

10月5日(水)、不言実行館アクティブホールで俳諧師・大野鶴士氏による講演が行われた。講演会には、日本語日本文化学科の学生(3年生72名)と教職員(8名)の計80名が参加した。

大野鶴士氏は、俳諧流派「美濃派」で第41世道統を務めている。演題「俳句と連句」のもと、現代の「俳句」と「連句における発句」の差異について講演された。俳句と発句は5・7・5の短型詩であるという点は共通するが、発句はその場の参加者(連衆)に対する挨拶吟の役割を持つことを言及された。また、講演では心理的要素の反映という観点から「AIによる作句の可能性」や「心理療法における連句の活用」についても触れており、文理融合研究を推進する本学にとってふさわしい内容であった。

拝聴者は学生であることから、和歌や連歌・俳諧の違いといった基礎的な解説をふまえた上で、上述の内容をご紹介された。また、講演の中盤ではクイズの時間も設けられており、学生の思考を刺激する工夫も見られた。

なお、大野鶴士氏は名古屋や春日井市内に門弟がおられる。そのため、今後は講演の公聴者を学外にも募ることで、より充実した講演会の開催が期待できる。



【国際人間学研究科言語文化専攻 D1 男子】

今回、大野鶴士先生の講演を聞いて感じたことは2つあります。

ひとつは、「連句」と「俳句」の違いです。「座の文芸」である連句の発句は挨拶吟の役割を持つため、俳句との間に本質的な違いがあります。今回の講演では、日本が世界に誇る「他者への配慮(おもてなしに対する感謝の文化)」が作品の内に表れているということに気が付きました。今後は、春日丘中学校との「中大連携」などの機会、後輩たちに連句の素晴らしさを伝えられるようになりたいと感じました。

二つ目に、「AIによる作句」についてです。先端科学技術が発達した近年は、AIで俳句を作ることができます。しかし、挨拶吟の要素を持った連句の発句をAIが作ることはできるのでしょうか。疑問と興味が湧きました。今回の講演で、我々が日本文化を学ぶ意義とは、上述のような「他者への配慮」ができる人間性を育むことにあるのではないかと感じました。

8.その他

(1)プロジェクト室の活用

不言実行館に開設した「日本伝統文化プロジェクト室」は、活動の拠点として、展示やイベント等に活用されている。2022年度の活用事例について、その一部を紹介する。

① 放送研究会の取材(ケーブルテレビで放送)

伝統文化に関わる大学院生の研究活動について、日本伝統文化プロジェクト室を活用して放送研究会の取材があった(11月17日)。取材対象は、橋木宏成院生(国際人間学研究科 博士後期課程)の中部大学フェア2022での研究発表「新事業創出の基盤となる地域の文化的ネットワークの形成について」(「次世代研究者挑戦的研究プログラム」採択)で、放送研究会のYouTube放送「チューテレ」で紹介され、春日井市のケーブルテレビでも放送された。



② 「伝統玩具」を展示(幼児教育学科)

現代教育学部の幼児教育学科の学生が、「伝統玩具」を展示した(6/21~7/9開催)。学科では、千田隆弘講師の指導で伝統文化を取り入れた幼児教育に取り組んでいる。今回の展示には同学科の1年生81人、3年生6人、4年生6人が関わった。



③「雛人形製作ワークショップ」学生作品等を展示

幼児教育学科1年生81人が制作した手作りの「立ち雛」等を日本伝統文化プロジェクト室で伝統工芸士の加藤高明氏の人形と共に展示した。幼児教育学科の講義「保育内容指導（環境）」での伝統工芸士・人形師の加藤高明氏との連携学習の成果物である。「文化の日」と「七五三」、「きもの日」に因んで雛人形の歴史や着物について学び、手作りキットで「立ち雛」を製作した。立ち雛には日本の伝統である本物の着物生地を使用した。その特性を活かし、一人一人模様が異なる美しい立ち雛を作成できた。



(2)スポーツ大会

中部大学では、様々な「日本伝統文化」に関わる活動が展開されているが、「第20回中部大学全学学科対抗スポーツ大会」(6月8日(水)開催)では、チャンバラが実施された。競技の面白さに加えて、ノボリや陣羽織姿などで風情も感じられるイベントとなった。



プロジェクトメンバー

プロジェクト長
生命健康科学部スポーツ保健医療学科
工学部ロボット理工学科
人文学部日本語日本文化学科

〃

超伝導・持続可能エネルギー研究センター
事務統括本部長
学事部次長
人文学部事務室事務長
(プロジェクト庶務)

辻本 雅史 (フェロー)
伊藤 守弘 (学生部長・教授)
高丸 尚教 (教授)
永田 典子 (教授)
岡本 聡 (教授)
井上 徳之 (教授)
垣立 昌寛
永平 三喜
松田 博行
人文学部事務室

オブザーバー (参加学生)

樗木 宏成
奥村 望央
伊藤 舞
黒雲 愛華



(写真協力) 制作課

日本伝統文化推進プロジェクト 2022 年度活動報告書
編集・発行 中部大学日本伝統文化推進プロジェクト
〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200 番地
中部大学人文学部事務室
TEL 0568-51-4144